



スマホゲーム「防災×観光アドベンチャー『あの日』」制作と防災学習プログラムの開発

岩手県大船渡市キャッセンエリアプラットフォーム
(運営主体：株式会社キャッセン大船渡 取締役) 千葉 隆治



東日本大震災から10年以上が経過し震災を経験していない世代が育つ中、教訓をいかに繋いでいくかは、岩手県でも課題となっています。大船渡市の市街地で津波被害を乗り越えてきた地域事業者などからなるキャッセンエリアプラットフォームは、地震津波発生から高台までの避難を疑似体験できるスマホゲーム「防災×観光アドベンチャー『あの日』」をスタートし4年目を迎えました。まちづくり会社キャッセン大船渡が運営主体となり、命を守れる人一人でも増やせるよう力を注いでいます。

震災での死因の90%以上が津波に巻き込まれた溺死であり、避難行動の成否が命を守ることに直結することから、このゲームをもとに避難行動にフォーカスした「防災学習プログラム」も開発。中高生の震災学習や大学生の講義、社会人の研修など受け入れを進めています。



防災観光アドベンチャー「あの日」学習プログラムを体験する中学生

1 「いきる知恵」と「わかれ道」

「まちを舞台にした『避難ゲーム』をつくりたい」。スマホゲーム「あの日」の誕生は、プロジェクトベース学習（PBL）の場としてキャッセン大船渡が実施する「大船渡まちもり大学」に参加していた地域の高校生から生まれたアイデアがきっかけでした。

スマホゲームは、地域住民が音声と画像で登場し教訓や体験談を伝える「いきる知恵」と、被災各地の人々が避難過程で体験した出来事を



まちのいたるところに設置されている「QRボックス」

クイズ化した「わかれ道」のQRボックスを大船渡駅周辺の「キャッセンエリア」のあらゆる場所に設置。プレイ中にはガイドはつかず、参加者が主人公となって制限時間30分以内で「いきる知恵」を集め、指定緊急避難場所でもある高台の神社を目指します。

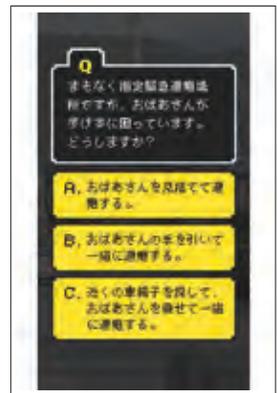
制限時間は震災時に津波が当地域に到達した30分に合わせました。「わかれ道」のクイズは択一式で、回答の選択によっては避難時間が加算される仕組みになっており、実際に歩いた時間と加算時間の合計で30分以内にゴールできるかが、ゲームの鍵となります。

防災学習プログラムは、120分の行程でゲーム前の説明、ゲームプレイ、振り返りを実施。避難行動を深掘りする内容で①避難時間の猶予

【TOPIX】

総務省消防庁主催
第29回
防災まちづくり大賞
総務大臣賞受賞

【PR movie】



避難行動時の「究極の決断」を問う「わかれ道」

はあまりにも短い②慣れていない土地では避難に時間がかかる③避難では「究極の決断」の連続になる—ことを解説し「気づきの定着」を図ります。学習シートも用意し体系的に学べるように心掛けました。

2 エビデンスも「楽しさ」も

「いきる知恵」には世代を超えた住民17人に参画いただきました。経験談を伝えるガイドを積極的にしてきた女性の方からの「年を重ねるにつれて記憶もあいまいになる。音声と画像で残ることでずっと伝えられる」との言葉は、制作開発を進める大きな後押しになりました。

共同開発者である東北大学災害科学国際研究所の柴山明寛准教授にエビデンス確保をはじめ伴走いただき、「わかれ道」は全20問を用意しています。現地での疑似体験を通して「考えている以上に避難は簡単ではないこと」を体感し、備えに繋げてもらいたいです。

「楽しめること」にも注力しました。開発にはエンターテインメント分野で世界的な実績がある制作会社が参画し、音声AR技術を活用して没入感も追求。プロのナレーターも入り避難過程での出来事をドラマ風に再現し「わかれ道」のクイズを投げかけます。実際にプレイした中高生から「おもしろかった」という声をもらうことが多いです。



地域の人から教訓や体験が聞ける「いきる知恵」

3 「自分ならどう動く」学べる

これまでに幅広い世代の約2,000人が大船渡に来てスマホを片手にまちを歩き疑似体験しています。震災学習では県内をはじめ、北海道、東京、神奈川、静岡、大阪などの中高生が来ています。

4年連続で学習に取り入れた県内沿岸部の中学

校の先生は『自分ならどう動くか』を考えることで命を守るスキルを高められる。座学など聞くだけでは得られない学びがある」と取り組みの意義を語ります。

体験した生徒からは率直な感想が届いています。

「困っている人は助けるのが普通だと思っていたが、全部助けていたら自分も津波に飲まれてしまうことを知った」

「家族と事前に避難経路を確認し合うことが必要だ。どんな状況なら人を助けられるかを理解しなければならない」

『いきる知恵』から震災を経験した人の当時の様子や復興に対する思いを知り、今度は自分たちが語り継いでいかなければならないと思った」

4 持続可能性の確保

持続可能性を高める上で防災学習プログラムは有料とし10人以上から受け入れています。料金については全国の旅行代理店にヒアリングして設定。学びを深める上で震災を総合的に学べる「東日本大震災津波伝承館 いわて TSUNAMI メモリアル」(陸前高田市)と連携し、TSUNAMI メモリアルを利用する場合はプログラム料金を減額しています。今後は近隣の防災啓発や伝承活動に取り組む団体とも組んでモデルコースなどをつくり三陸を発信していきたいです。

伝承の取り組みは、体験した世代から次の世代に繋げていかなければ途絶えてしまうため、誰もがあらゆる形で伝える機会に参画できることも模索しています。

スマホゲームで急な階段を登った先にあるゴール後に、参加者へのエンディングメッセージとともに流れる楽曲があります。震災当時は大船渡の小学6年生で、中学時代にバンドを結成し、現在も活動を続けるロックバンド「FUNNY THINK」によるものです。震災当時に子どもだった世代が「伝える側」として古里の力になっています。伝承のバトンをさらに繋ぎ続けていきたいです。

【問い合わせ先】

株式会社キャッセン大船渡

岩手県大船渡市大船渡町字野々田12-33

電話：0192-22-7910